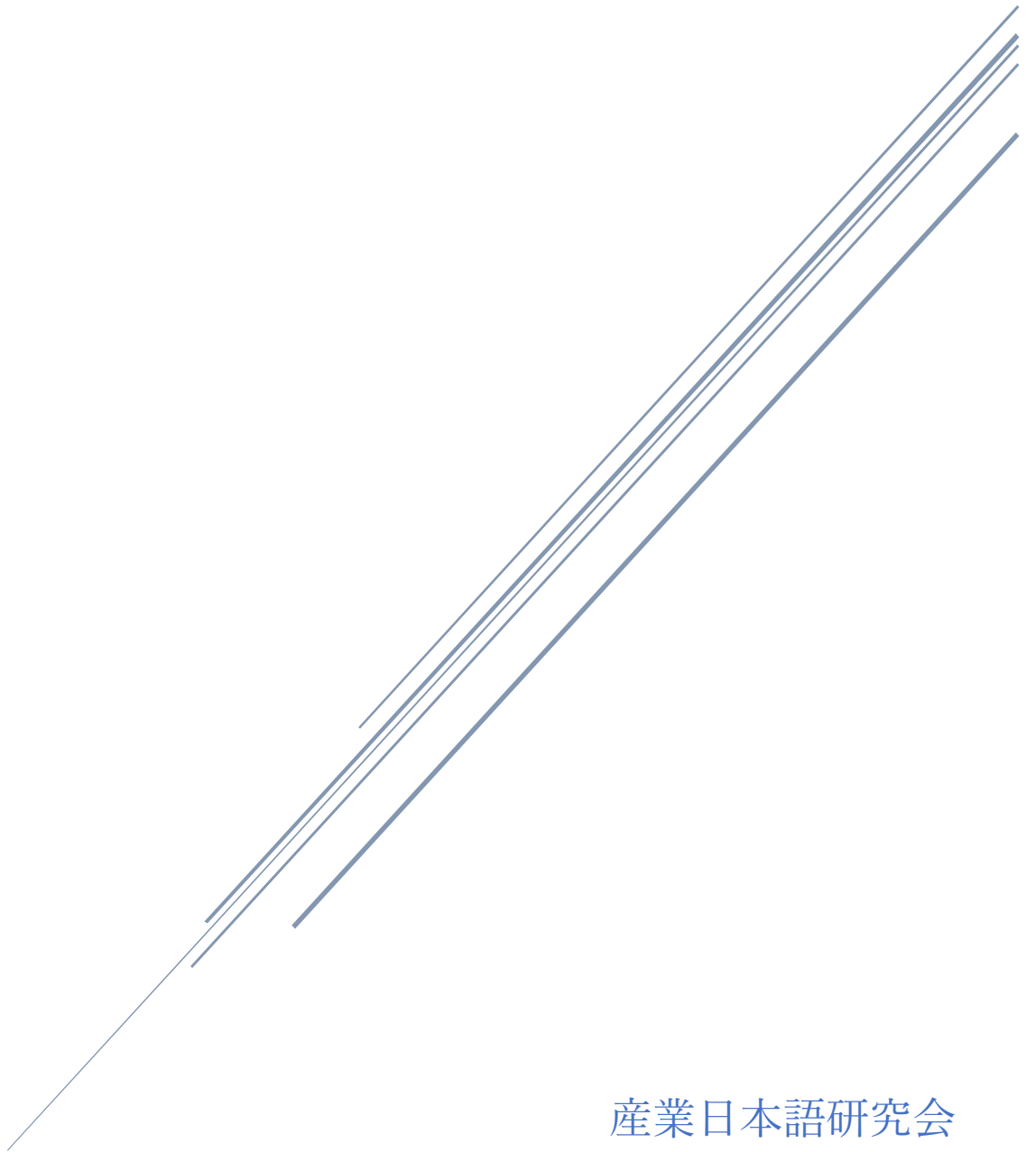


ビジネス文書

書き方読本（ダイジェスト版）



産業日本語研究会
ライティング分科会

目次

1. はじめに.....	1
2. 世界の把握のしかた	2
2.1. モノゴトの在り方の把握	2
2.1.1. 分節による外世界の理解.....	2
2.1.2. 2つの分節方法による概念把握.....	2
2.1.3. 分節の視覚化－食パンモデル	3
2.2. 分節がもたらす思惟.....	6
2.2.1. 2つの思惟（推論方法）	6
2.2.2. 「数（量）の世界 VS 結びつき（関係）の世界」における因果推論	6
2.2.3. 分節が生む英語と日本語の「語り」の違い（作図法）	8
3. 日本語と英語の比較対照	11
3.1. 単語の概念形成方法.....	11
3.1.1. 概念形成に用いられる特徴量の違い	11
3.1.2. 単語の概念の拡張方法の違い	11
3.2. モノ（名詞）の概念形成の違い	13
3.2.1. 名詞のもつ意味と表現	13
3.2.2. 「～がある」と There 構文（個別存在）	14
3.2.3. 「～は～である」と“X is Y”（恒常存在）	15
3.3. コト（動詞）の概念形成の違い	17
3.3.1. 範囲的（三相）VS 刹那的（单相）	17
3.3.2. 出来事の言語化方法～三相 VS 单相～	18
3.3.3. 動詞のもつ意味	19
3.3.4. 動作や行為.....	20
3.3.5. 時間経過	22

1. はじめに

ライティング分科会では、誤解なく伝わるビジネス文書の書き方マニュアルの作成を目指しています。私たちは日本語を母語としていますが、言語は思考の表出だという考えのもとに、まず人がどのように世界を認識するのかを明らかにしました。このことを理解すれば、どのような文章がどのような思考を反映しているのかを正確に把握できるはずです。目標とするマニュアルは、読み手に人の思考方法への気づきを促すことで、より深く文章が表す意味を知り、自身も文章による正確な意思伝達ができるようなライティングルールをとりまとめることです。

本報告では、人の世界の認識のしかた、そしてそれが言語の表現にどのように反映しているかを、実例を挙げて説明を試みました。説明には、2つの対照的な思考方法をもつ英語と日本語という言語を取り上げています。

2. 世界の把握のしかた

2.1. モノゴトの在り方の把握

世界は、絶え間なく変化し続けています。私たちは、その中から、生存するために必要な情報を、世界を分節することによって得て、そして把握しています。

2.1.1. 分節による外世界の理解

分節とは、全体をいくつかの区切りに分けることをいいます。例えば、音声学では言語音を母音と子音に区分しますが、この有意味の音の区分化が分節の一例です。

他方、心理学では、全体性の中における分化した構成部分を分節と称します。つまり、無分界の外世界や内世界を、相互に関連を持った全体と部分に区分けして取り出して実在させた対象のことを指します。本稿でいう分節は、この心理学における意味で用います。

ところで、私たちが住んでいる地球は、たえず地軸の周りを回転し²、太陽を周回しています。今という時間は何処にも無く、留め処なく時は過ぎていきます。人は、生存する上で世界の状況を詳しく知らねばならないにも関わらず、その状況は、刻一刻と留まることなく変化するのです。フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（[2]）が指摘したように、「世界は持続して変化し、決して留まることがない」のであり、絶対的な無分界性を持っているのです。

ここで、世界を知ろうとする私たちの側に目を向けてみると、人は耳の可聴範囲や眼の可視光範囲など、甚だ限られた範囲でしか情報を得ることができません。さらに、皮膚の部位によっても、感覚受容器数の不均質さと順応速度の違い³があるなど、知覚情報の検知分解能もばらついています。情報を検知した信号は、神経線維によって脳に伝わりますが、その速度も 100 メートル毎秒から 1 メートル毎秒と変化に富んでいます⁴。その後、感覚器を通じて得られた信号情報を脳内で処理するのですから、その結果を、つまり外界の有様を脳内イメージとして自己が意識する頃には、既に世界は違う状況に変化しています。私たちには、有りのままの世界の状況を知ることが不可能なのであり、精々、脳内において「外界の状態を感覚信号を介して推論するしかない」（[3]：23 頁）のです。ならば、自己意識の中において、概念取得の基礎である分節でさえも、正確な分節ができるわけではなく、推論に頼って作られた概念であることになります（[4]）。私たちは、捉えどころのない外世界を、限られた能力を用いて分節を試みることで、なんとか生活可能なレベルで理解をしているのです。

2.1.2. 2つの分節方法による概念把握

私たちは、外世界の変化を、自己に有意味なものとして認識しなければ生きていけません。ところが、外世界の状況を形作るモノやコトは、ありのまま（本質）を捉え難いので、限られた情報から推論することで認識するしかありません。例えば、時間や空間は未だその存在が直接観測されていないにもかかわらず、外世界は、時空間の中に在ると想定しています。しかも、時間や空間は直接知覚できません。そこで

² <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%B0%E7%90%83%E3%81%AE%E8%87%AA%E8%BB%A2>

³ <https://www.kango-roo.com/learning/2411/>

⁴ http://web2.chubu-gu.ac.jp/web_labo/mikami/brain/12/index-12.html

私たちは、時間と空間を、知覚可能なモノを通じて感知することになります。モノが知覚できれば、そこにモノが存在できる場所、つまり空間があるのだと考えるでしょう。また、時間は、「①モノの位置変化」と「②モノの状態の変化」によって感じ取ることができます。モノが位置変化すれば、時間の経過を感じるでしょうし、モノが状態変化しても、時間の推移を感じるでしょう。実際、①と②は、私たちの概念獲得のための分節の手段なのです。詳しく説明しましょう。

①による概念獲得のしかたは、時間がどこでも連続的で均質に経過すると想定して、空間（場所）方向に世界の分解を試みる（分節しようとする）空間指向（あるいは場所指向，space-oriented/location-oriented）に基づきます。モノの位置変化は、形状が不変のモノが、単一空間において、起点から終点まで、時間連続的に軌跡を描いて移動したと考えることによって知ることになります。現実には、空間の存在も時間の存在も、どのようなものであるのか、物理的な観測はされていませんし、一瞬たりともモノは不変・不動ではありません。しかし、自己に有用な「モノの移動」を無分界な世界から切り出すには、絶え間なく運動を続けるモノに対して、ある一点を移動開始の起点とみなし、次の一点を移動終了の終点とみなすのです。この点が、不動点です。不動点である点と別の点を仮に脳内に設けることで、はじめて、私たちは外世界の存在や変化を認識できるのです。特徴的なのは、単一の空間（場所）の背後に「今という瞬間」の連続である「線のような」時間が在ると見做し、不動性を分節の道具としている点です。

②による概念獲得のしかたは、空間はいつでも不変であることを信じて、時間（順序）方向に世界を分解しよう（分節しよう）とする時間指向（あるいは順序指向，time-oriented/sequence-oriented）に基づきます。これは、ある状態におかれたモノが、時間の推移によって別の状態に変化したと考えることによって、外世界の存在や変化を認識する方法です。このような認識をするためには、ある空間の中に不変の状態が存在すると想定し、その後、別の状態に変化したという世界を想定する必要があります。もちろん、①のときと同様、現実には、空間の存在も時間の存在も観測されておらず、一瞬たりともモノが不変であることはないのですが、自己に有用な変化を捉えるために、モノが、ある状態から別の状態に変化したという処理を脳内で行うことによって、外世界の存在や変化を認識します。特徴的なのは、状態の変化を知るために、必要な空間は複数、つまり変化前の空間と変化後の空間が存在すると考えていること、そして「今この瞬間の空間」とは、モノゴトの変化が閉じ込められた不変の「(時間的に) 薄切りのような」空間だと見做すところです。この薄切りの空間の中では、時間は瞬間的なものであり、空間どうしは、変化前と変化後という順序づけを持つのみで、それが「時間」とであると捉えています。ここでは、不変性が分節の道具です。

2.1.3. 分節の視覚化－食パンモデル

(1) モノ（対象）の把握

2つの分節の方法を、図によって視覚的に確認していきましょう。どちらの分節を採用するかによって、モノの捉え方が変わることになります。

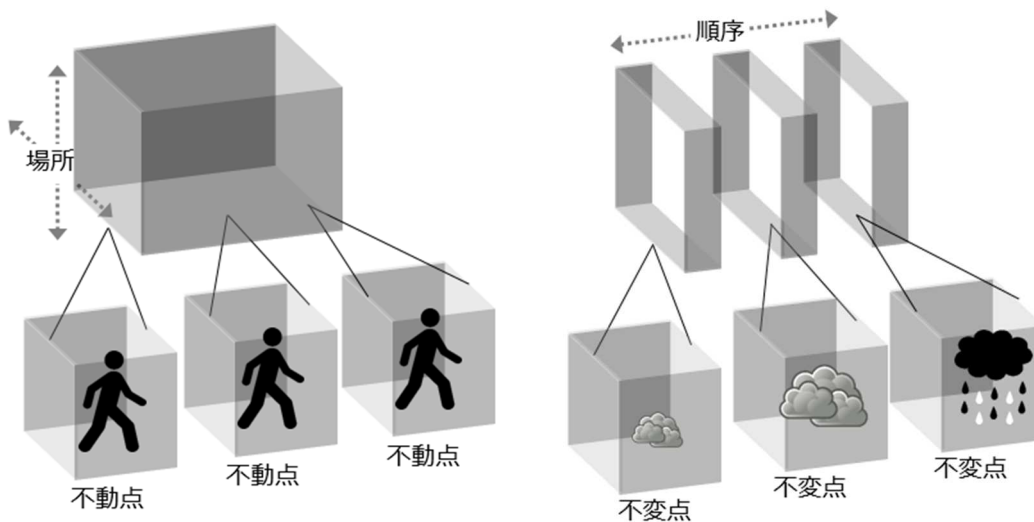


図 1 位置変化モデル（食パン一斤モデル） 図 2 質変化モデル（食パン一片モデル）

図 1 は、空間（場所）指向の分節を視覚化した図です。モノの位置変化によって動き（すなわち時間の経過）を把握しています。位置変化とは移動であり、多くの場合、目視で経路を追うことができます。動く（位置変化する）間、モノはその形状が変わってしまえば認識ができませんから、モノは外形的に固定された存在（幾何存在）だと見做します。

時間経過は、均質で連続だと想定されており、時間によって連結された空間は単一空間であるとみなして理解していることから、単一の世界観が生まれることになります。単一の世界観では、その中で同一性の矛盾が起きてはいけませんから、同一物は重複して存在することはできず、モノの数は有限個しか存在し得ないと考えざるを得ません。そこから、モノの一部をすべて集めれば全体になるという考えが生まれ、部分と全体からなる単一世界観が生まれてきます。場所を見渡す形から食パン一斤モデルとも呼ぶことができます（[5]：44 頁）。

図 2 は時間（順序）指向の分節化を視覚化した図です。「不変のここ」から「もうひとつの不変のここ」への変化という複数の間（ま）の遷移によって、時間の経過を把握します。質変化においては、モノは形状変化するため、外形的に固定的された存在として定義することができません。その代わり、質は変化しても変化することのない役割としての存在（機能存在）がモノであると見做されることになります。このような認識の仕方から、空間は複数存在すると考える世界観が生まれます。複数空間は単一世界ではないので、その中に存在する役割物（モノ）も全体数は把握できず、有限個でもありません。したがって、モノの一部分を集めても全体にならないという複数世界観に結びつきます。順序を見渡す形から食パン一片モデルとも呼ぶことができます（[5]：44 頁）。

(2) コト（出来事）の把握

コトとは、モノの位置変化やモノの状態変化のことです。どちらの分節のしかたを採用するかによって、コトの捉え方は、変わるようになります。

変化は、時間経過の中に在り、絶え間がありません。ここから人にとって意味のある変化を捕捉しようとすれば、時間に何らかの区切り（分節）を入れなければなりません。

まず、図 3 に示すように、不動点によって分節した位置変化の世界では、開始位置（静止）から終了位置（静止）までに区切りを入れます。連続的な時間から、ひとかたまりの時間を取り出すイメージです。

(☞図3の一斤の食パンが左右の端で切り取られた図参照) この動きは、目視体験できることが多く、始点から終点までを連続した経路(時間の経過)として追っていくことができます。コトとは、外形(幾何)存在に何らかの力が作用したために、移動が起きたものであるという概念化がなされるのです。

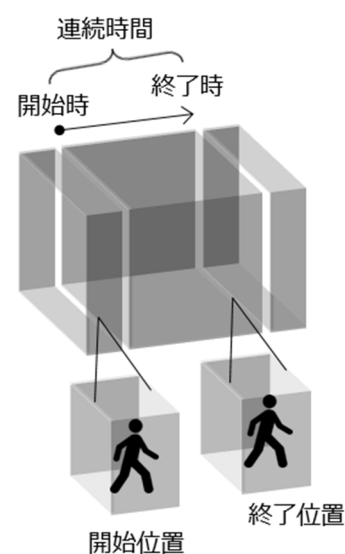


図 3 位置変化の区切り

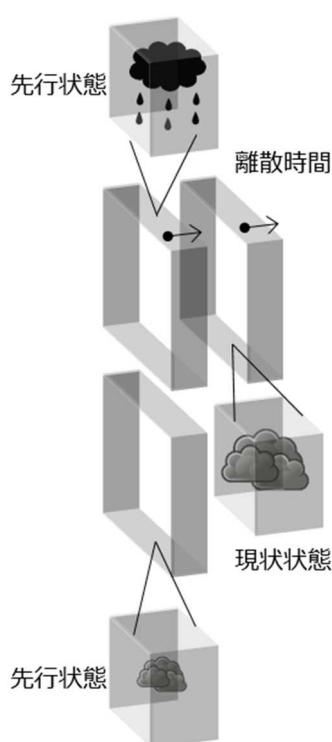


図 4 質変化の区切り

次に、図4に示すように、不変点によって分節した質変化の世界における、コトの概念化のしかたを考えます。質変化においては、絶え間のない時間経過の中から、意味のある連続的な時間の幅を切り取って区切って概念化することは容易ではありません。例えば、水が凍るといったような質変化は、長時間にわたるため、目視が困難であり、さらにはどのくらいの時間で凍るのは温度に依存するため、一定ではありません。どこからどこまでの時間を区切ればいいのかわかりにくいのです。そこで、変化前の状態をもつ空間と、変化後の状態をもつ空間を脳内で想定することによって、変化(コト)を認識します。しかし、このやり方は、位置変化のように開始から終了ま

での連続的な時間をイメージすることはできません。時間の存在は、変化前と変化後の状態に発生順があると想定することによって認識するのです。

ただし、変化前と変化後の状態を発生順に並べるといっても、質変化は「水が凍った」や「雪が溶けた」といったような現象ですから、時間的にどこが変化の基準状態なのかが不明瞭である場合が多くなります。つまり、コトの発生状態を認識することは困難なのです。そのため、時間に順序を付ける際に基準となるのは、目視認識が可能な「ここ今」の現状状態です。そこから、図4に示すように、より前の状態を推測して、その変化の推移が矛盾しないように順序付けることで、コトが起こったこと、さらには時間が経過したことを認識するのです。図4は、現状状態が曇りであることを示しています。ここが基準となって、曇りとなる前の状態を推測します。この図では、曇りという現状状態になる前にどのような状態があったのか、複数の可能性を推測しています。例えば雨、または薄曇りなどが考えられます。どちらが実際の変化の開始点であったかを知るには、例えば、地面が濡れているなどの付帯する情報を得ることで可能になります。質変化によるコトの認識は、位置変化によるコトの認識よりも、推論に頼る比重が大きいです。

表 1 に本節の内容をまとめます。

表 1

食パンモデル	1 斤モデル	1 片モデル
世界の分節 (信念による実在化)	(時) 間の経過の均質性に拠る (不動点把握)	場 (所) の変化の均質性に拠る (不変点把握)
特徴量の取り出し	外形・幾何実在(不動のモノゴト)	役割・機能実在(不変のモノゴト)
動き (時間の経過)	位置変化 (連続時間)	質変化 (順序時間)
世界観	単一の世界	複数の世界

2.2. 分節がもたらす思惟

人が分節によって外世界を認識しているのであれば、思惟は、その認識を基盤として行われるはずで
す。本章では、先に述べた 2 つの分節方法が、人の思惟にどのような影響を与えるのかを見ていきます。

2.2.1. 2 つの思惟 (推論方法)

ここで述べる思惟とは、自分が既に知っていることから知らないことを推論することを指します。この
方法には、大きく分けて演繹と帰納の 2 つがありあます。[前件→(ならば) 帰結] の形式で、根拠から
結論を導く推論方法が、演繹です。演繹的推論の特徴は、前件に暗黙に含まれている情報を解明し、そ
こから結論を導き出す分析的推論をするところです。

いっぽう、結論からその根拠を探る推論方法が、帰納です。帰納的推論の特徴は、経験的事実から、新
しい知識や情報を拡張的に獲得するところです ([7]: 32 頁～33 頁)。なお、帰納的な推論方法には、
個々の事例から一般化する枚挙的帰納法、いちばん良さそうな説明へと推論する仮説検証的な推論法、類
比的に知識を拡張するアナロジー法があります ([8]: 51 頁)

ここで、2 つの分節の方法を思い出してください。位置変化による分節では (図 1 や図 3 の食パン一
斤モデル)、ここ今の存在 (原因) が、軌跡を描いて終点 (結果) に至るという世界観をもつため、[前件
→(ならば) 帰結]、つまり[原因→結果]の形式をもつ演繹的な思惟と馴染みやすいと言えます。これに
対して、質変化による分節では (図 2 や図 4 の食パン一片モデル)、質変化の起点が目視体験できない
ことが多いため、変化前の状態はおぼろげな記憶や推論に頼ることが常です。このような世界観では、こ
こ今の状態 (結果) を所与のものとして、より前の状態に原因があると考え、[結果→原因の推論]の形
式をもつ仮説検証的な推論と馴染みやすいと言えます。この推論は、変化後の状態から変化前の状態を探
ることから、仮説演繹推論や因果的仮説推論 ([9], [10]) などと呼ばれます。

2.2.2. 「数 (量) の世界 VS 結びつき (関係) の世界」における因果推論

2 つの分節方法は、おのおのに親和性の高い因果推論方法を用いることに繋がります。ここでは、演繹
に対して、帰納・条件推論・仮説演繹の 2 つに大きく区分して、2 つの分節方法との結びつきを観察しま
しょう。

演繹的な推論は、三段論法推論としての研究が長く、なかでも量子子との関係が深いことが知られてい
ます ([11]: 41 頁～47 頁)。前件や帰結を表す文を命題になぞらえて、名詞で表現される部分を変項と
して扱います。変項は「すべての」「いくらかの」といった量化表現で限定されますから、集合論とも整
合しており、そのことから三段論法による表現をオイラー図で解くことができます ([11]: 46 頁～47

頁)。

このように、数を数える、数の集合を想定するといった推論は、不動性による分節（表 1）を行ったときの世界観とよく符合します。この世界観においては、単一空間の中に外形をもつモノが有限個存在すると捉えていますから、モノが数えられる概念物である（量的概念）という前提で、モノの全体数の集合があると考えるので、演繹的な数（量化）表現と非常に親和性が高いと言えます。

いっぽう、[前件→（ならば）帰結]の恰好の「→（ならば）」の部分に焦点をあてた推論は、条件推論と呼ばれます。これは、条件文に基づく演繹推論の一種ですが、「今ここ」の状態の原因を知るために、前件を自明の原理ではない（アプリアリではない）と前提して思考を巡らす点で、仮説演繹に似ています。また、帰納は、「ここ今」の結果状態を生んだ原因を、諸事例から学んで、原因と結果の関係を規則化するものです。いずれにも共通するのは、前件があらかじめ自明の原理として与えられたものではないという点であり、かつ前件と帰結に関係性（因果性）があるかどうかを見極めようとする思考方法であるという点です。（[11]：105 頁～117 頁）。

これらの推論方法は、不変性による分節を行ったときの世界観とよく符合します。この世界観においては、「ここ今」の状態だけが確かであり、それがどのような質変化前の状態によってもたらされた結果なのかを常に推論によって補足しています。「変化前の状態」がどうであったのかは、自明の原理ではないのです。さらに、変化前と変化後の 2 状態は、時間的に不連続な別空間に存在していると想定していますから、推論によって因果関係があると考えているだけです。つまり、「ここ今」の原因を知るためには、変化前の状態をいくつか想像してみて、もっとも可能性の高いと思われるものを選択して、因果関係を認めることになるのです。演繹推論のように、「原因の中に結果が含まれている」といったような単一世界を想定した、決定論的な因果関係は存在し得ないのです。

それでは、実例として「日本人は外国語が苦手だ。」という文を取り上げて検証してみましょう。この例文の「日本人」という表現が、食パン 1 斤モデル（図 1、図 3）によって分節されて言語化されたとします。そうすると、「日本人」は外形（幾何）存在を表象しますから、数えられる意味を持つことになります。（量化の対象として表 2 の上段右の文の意味を持ちます）。

表 2

文例	思考方法	解釈
「日本人は外国語が苦手だ。」	演繹推論（量子子表現）	「すべての日本人が、外国語が苦手だ。」 「いくらかの日本人が、外国語が苦手だ。」 「少しの日本人が、外国語が苦手だ。」
	条件推論表現（関係性表現）	「日本人であれば、外国語が苦手だ。」

それに対して、食パン 1 片モデル（図 2、図 4）によって分節され、言語化された場合、「日本人」は、数えられる対象とはなりえず、日本人としての役割（機能）つまり条件を満たす存在だと解釈されます（表 2 の下段右の文の意味を持ちます）。

なお、人が行う推論のパフォーマンス（どのような解釈が選好されるのか）について、量子子表現の場合は、合理分析のアプローチに基づいた確率的ヒューリスティクスモデルによって適切に説明できることが知られています（[11]：62 頁～68 頁）。条件推論表現の場合、合理分析に従う情報獲得理論が適切

な予測をすることが心理学で主張されています（[11]：150 頁～153 頁）。どちらの分節方法を採用するかによって、好まれる推論方法が異なるものの、いずれにおいても、それなりに合理的な推論ができることがわかります。

2.2.3. 分節が生む英語と日本語の「語り」の違い（作図法）

ここで言う「語り」とは、物語のような、一方向の情報伝達のことを指します。前節まで述べてきた 2 つの分節のしかたは、人に共通の世界の認識方法ではあるものの、2 つのどちらに比重をおいて認識しようとしているかは、言語表現をする際に、表れてきます。分節による概念化の基盤が異なると、言語化する際に、話し方や語り方に差が生じてくるのです。言語とは、思考の表出に他ならないからです。

ここで、英語と日本語という 2 つの言語を取り上げてみましょう。両言語は、異なる片方の分節方法に比重を置いています。その証左として、英語と日本語による物語の伝え方が、対照的であることが挙げられます。例をみていきましょう。



図 5

ありません。つまり対象物は数えられる意味を持つよう量化されています。単一世界観と言い換えてもよいでしょう。

図 5 は子供向けの聖書物語の挿絵⁵です。聖書のエッセンスが読みやすい物語として書かれています。これら一連のイラストは、同時同図、つまり一つの時間（瞬間）を一つの構図に書き込む図法で書かれています。時間の連続性が暗黙の背景にあって、構図は直線時間軸上の 1 点で起こる 1 つの出来事を表します。そして、一つの画面の中で同じモノは重複して現れることは



図 6

として知られています。一つの画面の中で同じモノ（同じカエルやウサギ）が繰り返し現れますが、それぞ

図 6 は、国宝の鳥獣戯画図の一部です。京都市右京区の高山寺に伝わる紙本墨画の絵巻物です⁶。この図法は、異時同図法と呼ばれ、異なる時間を一つの構図の中に描き込む図法

⁵ ©みやしたはんな いのちのことば社 2006 豆カード

⁶

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%B3%A5%E7%8D%A3%E4%BA%BA%E7%89%A9%E6%88%AF%E7%94%BB>

れに違う動作を描くことによって時間経過を表現しています。2.1.2 節の食パン 1 片モデルの説明で述べたように、幾つかの空間を（順序方向に）連結させて状況が変化していることを表しています。複数世界を時間順序でひとまとめにしたような世界観です。

もうひとつ、名作として名高い川端康成の長編小説、雪国の冒頭の文章をとりあげましょう。その叙述場面は、上越国境の清水トンネルを抜けたところだと言われています。エドワード・サイデンステッカー⁷による名訳もまた有名です。同時に、日英対照の好例としてもよく引かれる文章です。

図 7 は、英語訳である“The train came out of the long tunnel into the snow country.”のイメージ図で、語り手から見た世界を、眺望する視点から描いています。図 8 は、『国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。』のイメージ図です。条件文を使って 2 つの出来事を含む世界を叙述しています。



図 7

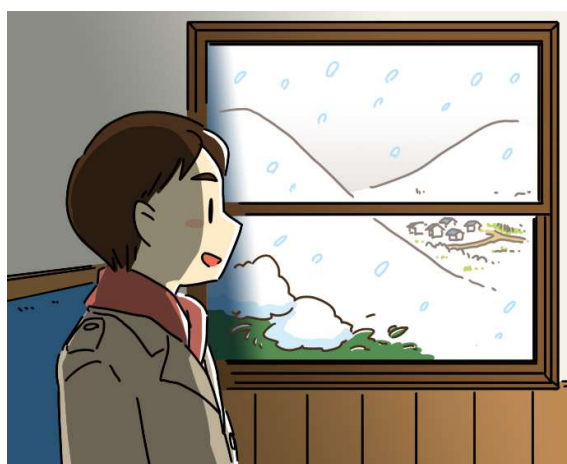


図 8

日本語文は、条件節を含む名詞述語（「雪国であった」）が主節です。日本語の名詞述語は、状態表現や恒常的な性質を表します。述語部分のタ形は、対象の物事を感じ、そして情感し尽くしたことを表します。つまり「雪国であった」は、感受・情感した結果の状態です。この結果状態が在ることの条件が「トンネルを抜けると」という節で表されています。

英語訳をみると、自動詞（“come”）を使っていますが、この自動詞は“out”が後続した句動詞であり、外形存在である“(a/the) train”が、位置変化（何もなかった開始状態から何かが現われた終了状態への移動）し終えたことを表します。そして、その結果として生じる結果状態を“into”で表しています。場所（“snow country”）は単一空間に重複した存在がないこと（唯一物であること）を示す“the”が前接しています。

表 3 に本節の内容をまとめます。

7
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%89%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%83%87%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%83%E3%82%AB%E3%83%BC>

表 3

食パンモデル	1 斤モデル	1 片モデル
世界の分節 (信念による実在化)	時間の経過の均質性に拠る (不動点把握)	場(所)の変化の均質性に拠る (不変点把握)
思惟の傾向	量的対象と演繹的な推論 (世界は数でできている)	関係的因果と仮説検証的な推論 (世界は結びつきでできている)
「語り」の描写の仕方	単一視点でモノの移動が時間連続的	複数視点で状態変化が断続的な結びつき

3. 日本語と英語の比較対照

3.1. 単語の概念形成方法

前章では、2つの分節方法が英語と日本語の語りの違いに反映されていることを述べました。実は、数学分野においても、集合論と位相論（[13]）という対照的な考えが存在します。前者は、特徴表現として「量」を用い、後者は「関係」を用います。これは、不動点と不変点による世界観と呼応します。このことも、2つ分節方法が、特定の思惟のしかたにつながることの証左になるのではないではないでしょうか。

本章では、分節のしかたが「語り」のみならず、単語の概念形成や、存在文「～がある」、さらには行為表現に至るまで、影響を及ぼしていることを見ていきましょう。

3.1.1. 概念形成に用いられる特徴量の違い

表 1 に挙げたように、対象を分節する際の特徴量の取り出し方には2つあります。不動性を使うとモノは、外形（幾何）実在の意味に偏り、不変性を使うと役割（機能）実在の意味に偏ります。以後、前者を「位置変化偏り」と表現し、後者を「質変化偏り」と表現します。英語は位置変化偏りの言語で、日本語は質変化偏りの言語です。例えば、表 4 に示す文例とその対訳はこの特徴をよく表しています。

表 4 英語の文例とその日本語訳

"I love a cat." / "I love cats."	「猫が好きです。」
"I love cat."	「猫肉（あるいは猫的なもの）が好きです。」／「猫が好きです。」

英語では、外形物としての cat には不定冠詞や複数形を用いる必要があり、外形が不明瞭な物は、無冠詞で表現しなければなりません。

もう一つ、例を挙げましょう。製造業の経営者等がよく引用するフレーズに「モノ言わぬ、モノがモノ言うモノづくり。」があります。この表現では「モノ」が繰り返されていますが、いずれの「モノ」も異なる意味を持っています。単語が複数の「機能」によって意味づけされているので、同じ名詞を用いながら、解釈が一つに定まらないのです。英語訳は直訳的には出来ず、"Manufacture in such a way that products which don't talk implicitly show their own merits."のようになります。同様の例として、なかば慣用表現として良く用いられる「たかが〇〇、されど〇〇」という言い回しがあります。

3.1.2. 単語の概念の拡張方法の違い

表 3 に挙げたように、対象を描写する際、使われる視点に違いがあります。位置変化偏りでは眺望的な単一視点で、質変化偏りの場合は感受的な複数視点をとります。ライティング分科会では、具体的な事例として動作名詞「拡大」について検討しました。日本語では「拡大（すること）」という抽象的な意味が、（世界は結びつきでできていて叙述対象との間に）感受的な視点の関係として確立できればよいので、様々な物事に違和感なく適用されます。これに対して、英語は「拡大（すること）」の対象がもつ性質によって様々な語に対応します（表 5）。

表 5

数量や規模などの拡大	expansion, extension, increase
商業(事業や貿易)の拡大	expansion
生産の拡大	increase
サイズの拡大	magnification, enlargement
段階的な拡大	escalation

上に挙げたように英語表現では、叙述の際に眺望的な単一視点をを用いようとするので、視点が変わるとそれに応じて表現が変化することが分かります。

表 6

“a meeting of a committee with enlarged membership”	拡大委員会	委員会が拡大するのではなく、そのメンバーが拡大することを明示する（前置詞を用いる）
“a broad interpretation”	拡大解釈	多岐にわたるという意味解釈（形容詞を用いる）
“an enlarged photo”	拡大写真	場所的な測度で広がる意味の解釈（拡大が終わっているので過去分詞を用いる）
“spread of infectious diseases”	感染拡大	場所的な測度で広がり且つ広がった場所を覆う意味の解釈（前置詞句を使う）

表 6 に示す各例が示すように、眺望的な単一視点での見方が、拡大する、あるいは拡大させる対象物の違いによって表現を変えていることが分かります。換言すると、何が変わる／何を変化させるという具体的な組み合わせごとに、意味的で且つ文法的な制約に従うと解釈できます。

日本語の場合、感受的な複数視点であることの特質から、語彙同士の結合の自由度が、節操がないかのごとく高く見えます。節操がないのではなく、叙述対象との間に感受的な視点の関係として確立できればよいのです。つまり概念的に区分されていればよいのであって、形態的あるいは構造的に文法上の制約として顕在化されなければならない理由はありません。語結合された句の持つ含意された意味が、言語社会集団の共通認識－共感を介して伝わればよいのです⁸。ただ、ビジネス文書など、その表現内容に正確さが求められる際には、この質変化偏りの特質を十分意識した上で表現しなければなりません。況や特許文のような科学的厳密さを要求する文章にあっては尚更です⁹。

物事の実在論 (ontology) 観点から比較し考察してみると、質変化偏りの日本語は、分類視点が内在された分類関係 (taxonomy) によって物事が区分される傾向が強く（総合的で連想的）、位置変化偏りの英語は、分類視点が外在された分類関係によって物事が区分される傾向が強いと考えられ、個々の分類関係は包摂関係 (partonymy, meronymy) に近い（分析的で離散的）のでしょう。

前者では、物事は多様体 (manifold) として抽象化され、感受性に由来して派生的あるいは拡張的な視点が導入されて意味が定まると解釈できますし、後者では、物事は個体 (individual) として抽象化され、眺望的な見方で構成的あるいは合成的な視点で意味解釈ができると考えられます。

⁸ いわゆる「暗黙の了解」、「空気を読む」や「阿吽の呼吸」と呼ばれます。否定的な見方として「同調圧力」と呼ばれることもあります。

⁹ だからこそビジネス文書の書き方読本が必要です。

3.2. モノ（名詞）の概念形成の違い

3.2.1. 名詞のもつ意味と表現

質変化偏りの特質－感受的な複数視点であることの特質を意識し、より表現内容に正確さを確保するための表現を考察し、その考察を踏まえたうえでビジネス文章の書き方を示します。

まず、物の意味を担う、日本語の体言と英語の名詞の使い方を比較対照します。

質変化偏り…日本語はこちら	位置変化偏り…英語はこちら
物の意味を担う日本語の体言は、外形的あるいは幾何的特徴に対してではなく、概して、感受的に一人が認めている機能や、周囲との関係性である役割に基づいて意味が決められています。 【「車」の定義】『車輪をまわして、動かしたり進めたりするようになっている乗り物や運搬具』¹⁰。 体言の意味は、役割（機能）中心に、概念化されて表象されます。そのため、物の外形を持って果たす役割（この物という指示的な意味）と、物を使うことで果たす役割（物に拠るという使用的な意味）を区別しません。 【例】「私は<u>鉄道</u>より<u>車</u>で旅行するのが好きだ。」 例文の「鉄道」は、列車そのものも列車サービスも表します。「車」は、私が所有する車も、道具一般としての車も表します。 物を役割（機能）存在として見做そうとしますから、「物である」という思考に偏り、物を数える対象としてみる意識が希薄になります。つまり、全体集合（クラス）と一部（インスタンス）を区別しないで体言を使います（左欄を参照してください）。 換喩（メトニミー）も、「車」が「車の運転をすること」のみならず「車の購入をすること」までも表現し得るように、英語とは異なる意味広がりがあり様を見せます（下記の文例）。 【例】「私ももう年だから、<u>車</u>はやめるべきだ」	英語の名詞は、概して、眺望的な物の外形（幾何）特徴とそれが動くさまを基本として意味が決められています。 【“car”の定義】“a road vehicle, typically with <u>four wheels</u>, powered by an internal-combustion engine and able to <u>carry a small number of people</u>.”（道路上の乗り物で、典型的には4つの車輪をもち、内燃機関で動き、少人数を運ぶことができる。¹¹） 名詞の意味は、外形（幾何）を中心に、概念化されて表象されますから具体物としての意味を表します。例えば、英語は普通名詞、物質名詞、抽象名詞という文法範疇を作ったうえで、個々と集合を分けるよう単数形形態と複数形形態を語に与えています。単一視点を好むので、外形（幾何）存在かどうかを峻別する文法的な表現手段（不定冠詞、無冠詞）を使います。 【例】a cat（一匹の猫、あるいはインスタンス）、cats（猫の集団、あるいはクラス）、cat（猫肉、猫らしさ） 【例】I like to travel <u>by car</u> but sometimes I use <u>rail services</u>. [抽象物/クラス] I like to travel <u>in my car</u>. [具体物]

■ビジネス文書の書き方

〈日本語の体言は、唯一物と同種物を区別していない。したがって、「それ」で前出の体言を指しても、

¹⁰ 精選版日本国語辞典の語義説明。

¹¹ オックスフォード新英英辞典の語義説明。

やはり区別できない。必要に応じて書き分ける。〉

【例】「あなたの車素敵ね。それが欲しいわ」

⇒「あなたの車素敵ね。同じ車種が欲しいわ」

モノの存在が「機能中心」に書かれるため、体言が具体的に何を指すのか誤解を生みやすい。適宜、書き換える。

【例】「ガスが壊れた」

⇒「ガス管が壊れた」, 「ガス器具が壊れた」

クラスとインスタンスを区別しないので、その区別が必要な場合には書き分ける。

【例】「彼は、エリートの医者であった。」

⇒「彼は、医者の中でもエリートであった。」, 「彼はエリートの職業とされる医師であった。」

医者という職業がエリートなのか、彼がエリートなのか不明なので、適宜、書き換える。

3.2.2. 「～がある」と There 構文（個別存在）

物の存在を表す典型的な表現として、日本語では「～がある」、英語では There 構文が用いられます。どちらも物の存在に気付いた際の叙述の表現として使われ、相互に対訳できるように見えます。しかし、2つの分節由来による概念形成の過程にある偏りから、その成り行きの結果として産出される文には、それぞれの特徴による意味の違いが色濃く表れます。

質変化偏り…日本語はこちら	位置変化偏り…英語はこちら
質変化偏りの日本語では、世界は結びつきでできていると見做し、関係的因果と仮説検証的な推論を使う傾向があります。複数視点で複数の仮説を試そうとします。 物がある状態を成立させる条件として、物が無い状態が仮定できれば十分であり、物がある原因や理由は不要です。無い状態があったから、今あるのだと考えれば結果状態を説明できます¹²。 図 4 に示したように、現状状態から（時間の経過を遡り）より前の先行状態を推測して、その変化の遷移が整合するよう順序付けて、2 状態を連鎖させます。例えば「猫がいる」というここ今の状態を結果状態として、先行する状態を推測します。特段の動機づけがない場合、「猫がいない」という状態から遷移したと考えます。 物が在る状態とは、物が無い状態からの遷移であると考えすることは、思考上の認知負荷も小さいことから、日本語母語話者は、ここ今の状況に物が	位置変化偏りの英語では、世界は数でできていると見做し、量的対象と演繹的な推論を使う傾向があります。眺望という単一視点で物が移動したと考えます。 図 3 に示したように、開始位置（静止）があって、とある経路を動いた（移動した）後に終了位置（静止）に至ると考えます。ここ今の状態が終了位置にあるとすれば、ここと違う場所から何らかの原因や理由に拠って移動したことを想起します。例えば、存在の出所位置がわかるのであれば、それを示します。“There is a bad smell <u>coming from the drain.</u>”（排水管から嫌なにおいがする） また、移動がないにせよ、物はその数が数えられるほど個別的でなくてはなりません。つまり、“There is a cat.”（「猫がいる。」）だけでは、存在文の成立に不十分です。そこで、“There is a cat <u>in the room</u>”のように場所の情報を加える必要があります。

¹² インド実在論哲学によると「無」には5つの区別があるそうです（[23]: 66 頁～71 頁）。

在ることの原因や理由をあれこれ詮索したり深く迫ったりしない傾向にあります。	また抽象物の存在であっても、存在目的を示すことによって抽象物なりの位置づけを表現します。 【例】 “There is a suitable position <u>available for all.</u>” (「全員に適切な職がある。」) 一般に、英語の There 構文は、場所にある物の位置や方向性(目的も含む)を示さないと、構文上誤りがないとしても文として違和感が生じます。また、位置変化偏りの英語では、位置変化の始まりが強く意識されるので、いわゆる作用因¹³－位置変化の原因は何であるのか考える傾向にあります。
--	---

■ビジネス文書の書き方

〈「～がある」という表現を使うときには、無自覚にその実在の個別性(時間や場所、目的)を省いてしまいやすい。必要に応じて明示する。〉 【例】「明日は、部長会議がある。」 ⇒明日は、<u>来年度の予算を決定する</u>部長会議がある。〔目的〕 ⇒明日は、<u>本社会議室で</u>、部長会議がある。〔場所〕 現実世界では物が只々在ることは滅多にないので、その実在の背景－「存在の原因」や「存在そのものを疑う」ことを意識する。 【例】「日本人は英語が苦手な人が多い。どうすればいいか論ぜよ。」 ⇒「本当に多くいるの？」という存在理由から考える。
--

3.2.3. 「～は～である」と“X is Y”(恒常存在)

「～は～である」は、物の「存在の在り様」を表す文です。英語ならば、“A is B”の表現が対応するでしょう。対訳可能な表現であるように見えますが、これまでと同じように分節の仕方の偏りから、結果として両言語の文には、それぞれの認識基盤に由来する特徴が見いだされます。

質変化偏り…日本語はこちら	位置変化偏り…英語はこちら
質変化偏りの日本語では、物(体言)の意味を、その物が言語社会内で果たす役割(機能)にしようとしします。つまり物は、人々に共通する認識によって支えられ、存在すると考えようとしします。ですから「～である」という物の在り様も、人々の共通認識の中にある成り立つこととなります。 【例】「猫は動物である。」	位置変化偏りの英語では、物(名詞)の意味を、その物に内在する性質である外形(幾何)にできるだけ関連付けます。知覚できる対象を実在と考え、しかも数えられる特徴を持つと考えますから、お互いの物は占める位置があります。ひとつの場所に重複して物が存在することはありません。 眺望的で経験的な単一視点を使おうとしますか

¹³ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%8E%9F%E5%9B%A0%E8%AA%AC>

この文は、「ペットである」「神社に祀られる」「ネズミを捕る」などの周囲との共通の関わりよう（感受し情感できること）によって、実在が認識される（図 9）。したがって、「猫は動物である。」という文には、叙述者（自分）も含めた周囲にあって「猫であると信じられている生き物は、動物であると信じられている」という意味を含みます。

周囲が示す範囲は、言語社会集団を想起するのが穏当なところですが、「吾輩は猫である。」や「僕は鰻だ。」のように、極論すると「～は～である」には、「物事は人が認識しているだけである」という認識論的な考え方の前提があります。

ら、要素と全体数（集合）や、部分と全体などの考えを使おうとします。例えば、“A cat is an animal.”は、“cats”（全体集合）のインスタンスであり且つ、“animals”（全体集合）のインスタンスでもあるという意味を持ちます（図 10）。

また「猫」は、生々しい姿態があり移動する物として意味付けされるので「猫であること」は、「爪がある、四つ足である、木に登る、鼠を捕る、…」など、その物が内在する性質によって他の概念と弁別されます。人の感受性や情感との関わりがなくても猫は猫であり得るのです。

“X is Y”を言い換えて、「X と Y には決定的な因果関係がある／X は Y を含意する」という文だと捉え直せば分かり易いかもしれません。例えば、「私の仕事は技師です。」の英語訳は、“My job is an engineer.”（誤り）ではなく、“I am an engineer.”です。“X is Y”は存在論的な認識の前提をもつ言語形式です。

■補助図

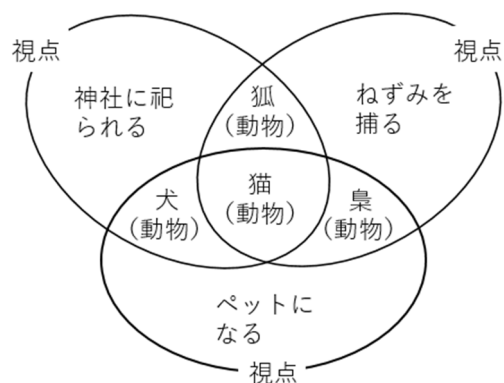


図 9 「猫である」の意味と視点

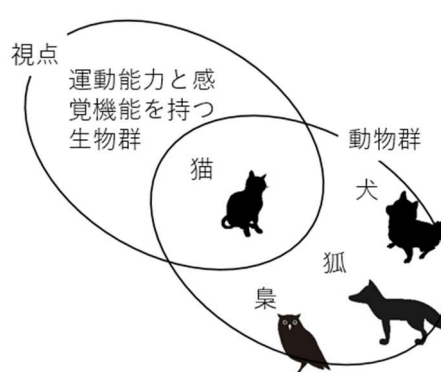


図 10 “A cat is an animal.”の意味と視点

■ビジネス文書の書き方

〈「～は～である」が共通認識でない場合、主張を担う支持文としては使わない。または、利害関係者の間で共通の認識が得られるよう書き換える。〉

【例】「日本人は外国語が苦手である。」

この文は、書き手と読み手の双方の視点で合意がなければ、支持文とはなり得ない。そうでなければ、定量的な表現に書き換えることで、主張として妥当性のある支持文にする。

⇒「各国の被検者に 1000 時間の英語学習後に TOEIC を受験させ、スコアを国籍で比較した結果、75%の日本人が平均より 100 点低かった。」（書き換え例）

または、書き手だけの認識（つまり意見）であることを明示する。

⇒「日本人は英語が苦手だと思う。」

3.3. コト（動詞）の概念形成の違い

日本語の文『ここって、ほっとするね。』に違和感はありません。この文はライティング分科会（令和3年度）で取り上げられ、その英語訳は直訳的に“This place is such a relief.”であること、ただし、「ここにいる」ことが「ほっとする」ことに必ずしも結びつかないので、“This place gives us a relief.”としたほうが、力の方向性が明示されていて連続時間を想起することから、英語表現として適切であることが議論されました。

3.3.1. 範囲的（三相）VS 刹那的（単相）

accomplishment（英語）は「業績、教養、才能、成就、偉業、成果、達成（感）、完成」という意味です。この“accomplishment”が担う意味は、出来事が「開始－継続－収束」の三相があるという考え方（[14]:167頁）を表しています。この中で著者は、英語では、例えば物理的音の特徴（「開始－継続－収束」）を直接受け入れて概念を作る例があるといえます。“a laugh”/“a sob”/“a knock”で、“have a heavy laugh”や“A sob was heard.”, “A knock was heard.”などです。なお、「相」はアスペクト¹⁴の意味です。



図 11 位置変化と質変化の具体例

英語では、一般的な出来事は「開始－継続－収束」（の三相）によって成り立つと見做し、この出来事が起こる蓋然性を表す表現を、may などのモダリティと呼んでいます。三相の出来事は、図 1、図 3 からすると

範囲（ホライゾン）的な出来事と言えます。図 11 の左側の図が位置変化の具体例を表しています。“I”は外形（幾何）存在です。

日本語の出来事は、動詞語幹部分が示すイメージを想起すると分かりますが、「開始－継続－収束」によって成り立つとは見做しません。動きの「推移」（単相、あるいは刹那的という意味でアオリスト¹⁵）によって成り立つと見做します。

¹⁴ アスペクトは相または体ともいいます。動詞が表わす動きの過程や状態などが、その時間的経過に関係なく全体としてとらえられるか、それとも時間的経過が問題とされるかの差異を示す文法範疇です。

¹⁵ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%83%88>



図 12 「食べる」と“to eat”

つまり境界がなく状態の推移が出来事です。モノは、役割（機能）存在で質変化します。図 11 の右側の図が質変化の具体例を表していて、「米」は役割（機能）存在です。

図 12 には、「食べる」と“to eat”を例にして相の違いのイメージ図を示します。図の上が「食べる」のイメージで、図の下が“to eat”のイメージです。英語では、“to eat”という出来事の意味は「食べ始め（開始）－継続－食べ終わり（収束）」を含意しています。それに対して「食べる」という出来事の意味は「食べ始め（開始）」（但し、未完）を含意します。「食べた」は「食べ終わり（終了）」（完了）を表します。語幹の「食べ」は刹那の動きを表すと考えられます。

3.3.2. 出来事の言語化方法～三相 VS 単相～

出来事の意味（動きの経過）とその表象の仕方が違うのは、既に述べたように、一つにはモノゴトの捉え方の違いに起因し、このことに深く関連する要因として、時間経過の認識の違いがあります。時間経過の認識には二重性があります（表 7）。時間が実在するかどうかは別として、私たちが認識できる時間経過は心理時間です。心理時間は、経験実在としての知覚による現在時間経過と、記憶と推論に拠って実在させる想像・創造時間の経過があります。

表 7

時間経過	物理時間	-----
	心理時間	知覚的な経験現在時間の経過（「ここ今」の経験する時間経過）
		実在を信じる想像・創造時間の経過（語りの時間経過）

経験現在時間の経過とは、経験している今の「われわれの日常生活のすべての出来事を、それらが展開していくのに応じて記録してゆく。」自動記憶（[15]:113 頁）があるので、眼前（持続する今）の表象としての叙述があります。過去の反復する経験から学習した記憶を現在時間にまで引き延ばしている（[15]:114 頁）表象としての叙述があります。前者は、日本語で「～ている」、英語では V_{ing} （現在分詞形）であり、後者は、日本語で「～ている」、英語では V_{pp} （過去分詞形）です。図 12 にあるように、日本語では刹那的な動きを想定するので表現が分かれていません。動いていても止まっても「ここ今」の状態に変わりがなく、表現を仕分ける理由がありません。

想像・創造時間の経過とは、人がその実在を信じる時間経過です。現在や過去、未来という抽象時間を創ったうえで、時間順序を連続させる場合と離散させる場合があります。前者は、過去と現在と未来が綿々と連続していると考えます。後者は、必ずしも連続しているとはせず、過去よりも現在はより後であり、現在よりも未来はより後であると見做します。

なお、食パン一斤モデル（図 1, 図 3）において、演繹的推察の結果状態を表さない、あるいは出来事の完了後の状態が含意されていることを結果盲といいます。意図した結果を信じて疑わないことです。食パン一片モデル（図 2, 図 4）では、結果状態だけを表し、仮説提示や想起の推察の手がかりを与えない、あるいは文脈に含意されていると考えることを視点盲といいます。推測した理由を信じて疑わないこと

です¹⁶。

表 8 にモノゴトの表現と日本語と英語の文型の対応を挙げます。

表 8

出来事	時間経過の違い	文型対応	文型の内実
範囲的（三相）	位置変化	SVOC	主語（外形存在＋動力因）－動詞
刹那的（单相）	質変化	TCP	主題（役割存在＋把握因）－述語

上の表で S は Subject, V は Verb, O は Object, C は Compliment, T は Topic, P は Predicate を表します。例えば、英語の動詞は「一斤のパン」を想起しながら考えると、その多様性を理解しやすいかもしれません。主語や目的語といった格要素と前置詞句が、専らパンの形状を変えると見做されるという解釈です。述語は「一片のパン」を考えるとよいでしょう。主題や補語要素がパンの恰好を変えます。格要素と補語要素は似たように見えることもありますが働きが違いますし、主語と主題は、その働きが全く違い、前者が数えられる世界を創り出そうとするのに対して、後者は、関係が支配する世界を創造します。

3.3.3. 動詞のもつ意味

これまで縷々と説明してきたように、質変化偏りと位置変化偏りでは、概念化の過程が違います。出来事の意味の創造にも違いを生み出します。出来事の意味を担う、日本語の用言と英語の動詞の使い方を比較対照します。

質変化偏り…日本語はこちら	位置変化偏り…英語はこちら
3.3 節のイメージ図で示したように、質変化偏りによって創り出される動きは刹那的な時間の経過を表します。例えば、動詞語幹で表す概念は殆ど状態に近く、ル形で動きの未了を、タ形で動きの完了を表します。このように出来事表現は動きの推移を表すことになります。 【例】「私は英語を<u>学んだ</u>。しかし、全然できるようにならない。」 「学んだ」という動詞は完了状態への推移だけ表し、範囲的な意味、つまり「学びとった」ことまでの意味を含みません。 日本語の動詞は「出来事の開始から完遂に至る」までの意味を含みません。動詞は、形容詞述語や名詞述語（名詞＋だ）とともに用言として機能し、いずれも状態性の高い意味を表します。	3.3 節のイメージ図で示したように、位置変化偏りによって創り出される動きは、開始点と継続状態、そして終了点がある範囲的な時間の経過を表します。終了以後の結果状態を含意することさえあります。 【例】“He <u>learned</u> English, but he can’t speak English at all.”（誤り¹⁷）（「彼は英語を学びとった。しかし全く英語が話せない。」） 学び取ることができれば、当然ながら能力を発揮することができます。溺れれば死にますし（drown, drowned）、矢を射れば的を射抜きます（shoot, shot）。英語の動詞の意味は、出来事が開始から完遂に至るまでの経緯を含むことが多いです。

■ビジネス文書の書き方

¹⁶ “He drowned but survived.”は非文ですが、「彼は溺れたけれど助かった。」は非文ではありません。

¹⁷ ただし learn を study に変更すれば正しくなります。

〈行為が到達か未達かを区別する必要がある場合は、表現する伝達内容に応じて適切に書き分ける。〉

【例】「ビジネス案を考えた。」

⇒「ビジネス案を考え付いた。」

⇒「ビジネス案を作成した。」

具体的な行動や明確な指示を必要とするビジネス文書では、状態の表現ではなく、取るべき行動を動作表現に表現し直す。その際、作用因となる行為者や原因を明示する。

【例】「教室のカギは締めておく。」

⇒「教室を最後に出る者がカギを締める。」

3.3.4. 動作や行為

動作や行為は動きです。動き（すなわち時間の経過）の把握を、不動のモノの位置変化で表す場合、不変のモノの質変化で表す場合があることを説明しました。動きの表象（動詞という語）は時間の経過に区切を設けることで概念化した結果です。区切り方によって動詞の意味が創り出されます。

まず、図 13 に示すように位置変化による動きの区切りは、位置変化の開始点と終了点です。2.1.3 節で説明したように、動きの推察には知覚したり経験したりする観察的な視点です。観察的であることから図にあるように空間的で、且つ単一です。

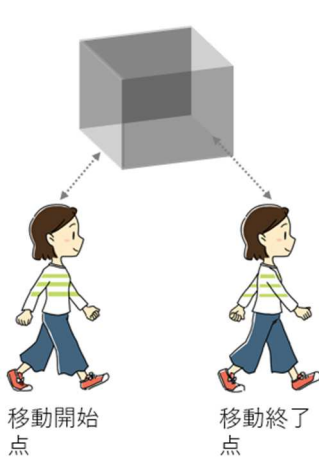


図 13 位置変化の動き

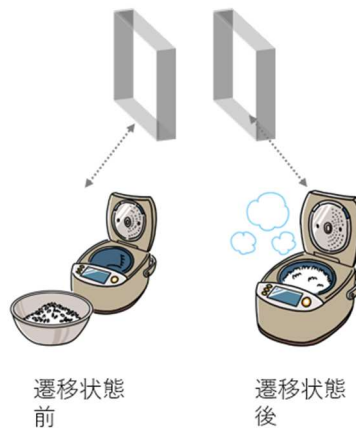


図 14 質変化の動き

これに対して質変化による動きの区切りは、多少難しく、ここ今の結果状態から推測して、質変化する前の状態を決めます(図 14)。遷移状態後を基準と見做し、この基準時点にある状態に至った過去の状態を推測して状態の開始時点を決めます。概して質変化の様は知覚したり経験したりできないことが多く、感受したり情感したりする非観察(つまり推測)的な視点で推論を行います。

例で示した両図とも言語社会では常識的に受け入れられる区切りです。歩き始めれば、歩き終わりますし、ご飯を炊くにはお米を用意し(洗いますが、とくに後者の場合、推察に頼ることから、出来事が生起した状況を取り巻く複数のモノとの関わりようを知って、初めて可能になることが多いです。例えば、図 14 では釜に米が入っていない状態をイメージしていますが、釜に米が入っていて釜蓋も閉まっている状態であるとか、精米する玄米を用意する状態も遷移状態前として見做せますから、一般には複数の状態から尤もらしい状態を定めることになります。この関わり様(よう)を「場」といいます。

人の認知は、質変化偏りと位置変化偏りのいずれも用いますが、既に見てきたように、日本語は、不変性に執着してモノを概念化し、動きの意味を質変化に求める傾向が強いです(質変化偏り)。英語は、不動性を崇拝してモノを概念化し、動きの意味を位置変化で顕著に示します(位置変化偏り)。例えば、「部屋がきれいになった。」は、自動詞を使って状態が変わったことを表しています。この日本語文の英語訳

は、他動詞を用いた“I cleaned the room.”です。

質変化偏りを、より分かりやすく説明するため次の例文を使います。

【文章例 1】¹⁸

私よし子は、6歳から8歳になるまで、いとこの花ちゃんの家の近所に暮らしていた。花ちゃんは私と
 同年だった。先日その花ちゃんに、20年ぶりに街でばったり会った。お互いの容姿はすっかり変わ
 ってしまって、花ちゃんのご両親に再度紹介されなかったら、花ちゃんかどうかわからなかった。で
 も、年を聞いてみると私と同じだったし、いっしょにザリガニとりをしたことも覚えていてくれた。花
 ちゃんも、最初は私がよし子かどうかわからなかったらしい。でも、私がA大学を出て、翻訳会社に
 勤めていることは、親戚を通じて聞いていたらしく、その話をし始めると、やはりよし子だと合点が
 いったらしい。

「花ちゃん」は、近所に暮らしていた頃（図 15）に比べて、大きな変化を経ていて、外形からは認識
 できません（図 16）。「花ちゃん」の存在を確かにしているのは、花ちゃんを紹介した両親であり、よ
 し子と同年であることであり、よし子とザリガニとりをした思い出である。「よし子」の存在を確かに
 しているのは、よし子の大学であり、翻訳会社であり、親戚であり、花ちゃんと同い年であることであり、
 花ちゃんとザリガニ捕りをした思い出です。



図 15 私と花ちゃん



図 16 花ちゃん

「花ちゃん」という名前であることは、社員証か名刺でもあれば確認できるかもしれませんが、し
 かし、「花」という名前をもつ人（同種の者）は、暮らしている周囲に何人もいます。紛れもなく、よし子が小
 さい頃いっしょに遊んだ、いとこの花ちゃん（独自物）であるかどうかは、場における尤もらしい状態の
 推測（多視点の役割の重なり）があることによって分かります。

質変化偏り…日本語はこちら	位置変化偏り…英語はこちら
「花ちゃん」の「質変化」は、役割（機能）存在のモノについて変化前後の両状態の結びつきの推測に基づき、尤もらしい関係の存在に拠ります。 尤もらしさを推測する「場」には、役割（機能）存在を実在化する幾つもの働き（視点）が現われます。「花ちゃん」が同一の人であることを担保する視点の束を使って「花ちゃん」を特定します。これを独自性といいます。 質変化を認める条件は、変化前後の両状態において「花ちゃん」の役割（機能）が同じであること	「位置変化」は、外形（幾何）存在のモノが実在して、それが単一の空間内を始点から終点まで連続した軌跡を描きながら移動することに拠ります。 「花ちゃん」の姿かたちが途中で変化したり（つまり変身したり）、不連続な軌跡を描いたりしたのでは、同一の人の位置変化であると認められなくなります。 位置変化を認める条件は、時間連続な単一の空間を想定し、始点と終点がひとつの軌跡で結ばれ

¹⁸ ライティング分科会の猪野委員が作成しました。

で、それは独自物として認められることです。 独自物であるかどうかを判断するには、両状態で、「花ちゃん」を取り巻くモノの在り様が十分に共通していなければなりません（よし子を通った A 大学や翻訳会社を具体的に知っていること、ザリガニ捕りの記憶など）。 束ねられる視点は、「知覚できる具体物（親戚）」や「認識上の抽象物（ザリガニ捕り）」など、独自物「花ちゃん」を限定することに寄与するものであればよいのです。 言い換えれば、質変化偏りの場合、「眺望経験できる具体物」と「抽象物」を区別することに意味が無いのです。実のところ日本語には具体名詞と抽象名詞の統語上の区別はありませんし、具体名詞に単数形と複数形の区別也没有ありません。	ていることで、「花ちゃん」が唯一物として認識されることです。 英語では、外形（幾何）存在のモノが実在できるよう数えられるモノを表現し易いように文法上の配慮がされています。 【例】“I like your car. I want <u>one</u>.”〔同種の物〕“The car is really nice.”〔唯一物〕 「花ちゃん」は、眺望経験的に形状が不変であることが基本なので、形状が不定であるような抽象物とは明確に区別されます。例えば、英語では、普通名詞の下位範疇に具体名詞があって、不定冠詞と無冠詞の用法区分がありますし、単数形と複数形の使い分けもします。範疇として抽象名詞があって具体物も無冠詞で用いることで、その抽象性を意味します。
--	---

位置変化偏りにおける単一空間を前提とした実在の定め方に比べて、質変化偏りにおける「場」を使った実在の定め方は、複数の可能世界を考える仮説検証的な因果推論を使いますから、より認識的な考え方の入り込む余地が大きく、そのため俗にいう主観的であるとか属人性が高いなどの特徴が指摘されることがあります。位置変化偏りは、眺望したり経験したりすることを基に、力を加えて位置を変える考えを使いますから、なべて客観的であるとか論理的であるなどの評価を得ることがあります。

■ビジネス文書の書き方

〈日本語は、抽象的な表現を無自覚に使いやすい。必要に応じて、個別で具体的な物と普遍で抽象的な物を意識し区別して表現する。〉

【例】「ガスを修理する。」

⇒「ガスコンロ[ガス管]を修理する。」

〈日本語は、状態を示す「どんなである」表現に偏りやすいが、意図的行為や行動を定める必要がある場合など、必要に応じて、行為者を明示したり結果を誘起する行動で表現したりする文を使う。〉

【例】「このドアは施錠が必要である。」

⇒「このドアは最後の退出者が施錠する。」

3.3.5. 時間経過

2.1.3 節で説明したように、位置変化における動きの推察には眺望したり経験したりする観察的な（場所的）視点で、図 17 に示すように、ここ今からより後に結果が生じるという演繹的な推論が使われます。



図 17 「ここ今」から「より後」 図 18 「ここ今」から「より前」

それに対して、質変化では、感受したり情感したりする非観察（つまり推測）的な（順序的）視点で推論を行います。この推論は、遷移には終点がないことから、図 18 に示すように、ここ今を結果状態とし、より前に原因や理由があると考える仮説検証的な推論

をします。この推論は、変化後の状態から変化前の状態を探るので、仮説演繹推論とか因果的仮説推論とも呼ばれます。このことから複数空間があると想像する世界観が生まれます。

順序時間…日本語はこちら	連続時間…英語はこちら
質変化偏りの日本語では、ここ今を結果状態と見做して、結果を生み出した原因や理由を、過去に遡り見出そうとします。これは非観察（つまり推測）的な認知行為で、複数の可能性を考慮することから、時間は順序（前後）関係として捉えられます。 【例】「米を洗った。ごはんが炊けた。」 “I washed rice. The rice is ready.”（誤り）のような直訳をしないだけでなく、2つの出来事の間に連続性があるように（例えば、「ごはんを炊くため米を洗った。」など）日本語の表現を言い換える。 【例】「火をつけた。体が暖まった。」 この2文は、2つの出来事間に直接的な前後関係があることを表していますが、時間の近接性がどの程度なのかの表現がありません。英語訳では、“We lit the fire and our body <u>soon</u> warmed up.”のように、時間の近接性を表現しないと「座りが悪い」とされます。	位置変化偏りの英語では、時間が連続するという解釈に加えて、「ここ今」から「より後」の時間の経過を使おうとするので、動きは、未来志向であるとの考え方を生み出します。 【例】「矢を放った。的が割れた」 この例文を直訳して“<u>I</u> shot the arrow and <u>the target</u> broke.”のように、主語を変えて英語にすると、行為主体と被動対象が瞬時に切り替わる印象を与えるので、2つの出来事の近接した連続性が表現できません。的を割るために矢を射るのですから、位置変化の起点をIに統一し、“I”が発生させた力と、その力の伝達先（被動対象）を表現すると英語らしくなります。 【例】“I shot the arrow and broke the target.” 英語では、上記のようなSVO構文を多用しますが、これは位置変化偏りに由来します。また時制の一致は、時間が連続であるとの考えに拠ります。

■ビジネス文書の書き方

〈日本語は、2つの出来事を表現するとき、出来事間の時間的な近接性が不明瞭な文を無自覚に書きやすい。必要に応じて、時間の連続性を明瞭にする。〉

【例】「国道4号線を走っていたトラックが乗用車に衝突し、2人が死亡した」

⇒「国道4号線を走っていたトラックが乗用車に衝突し、2人が病院に搬送後に死亡した」

【例】「裁判官が命じて、証拠が提示された」

⇒「裁判官が命じて、その場で証拠が提示された」

参考文献

- [1] 日本語マニュアルの会, “日本人のための日本語マニュアル (暫定第 1 版),” 11 2018. [オンライン]. Available: <https://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/>.
- [2] アンリ・ベルクソン著, 原章二訳, 思考と動き, 平凡社, 2013.
- [3] 乾敏郎 坂口豊, 自由エネルギー入門 知覚・行動・コミュニケーションの計算理論, 岩波書店, 2021.
- [4] ヤコブ・ホーブイ [著] 佐藤亮司 [監訳], 予測する心, 勁草書房, 2021.
- [5] 特許情報研究所, 令和二年度 産業日本語研究会 報告書 「産業日本語」 Technical Japanese, 一般財団法人日本特許情報機構, 2021.
- [6] 米盛裕二, アブダクション 仮説と発見の論理, 勁草書房, 2007.
- [7] 高根正昭, 創造の方法学, 講談社現代新書, 1979.
- [8] J. Pearl 著 黒木学訳, 統計的因果推論 モデル・推論・推測, 共立出版, 2009.
- [9] 中室牧子他, 「原因と結果」の経済学, ダイヤモンド社, 2017.
- [10] K・マンクテロウ, 服部雅史他訳, 思考と推論 理性・判断・意思決定の心理学, 北大路書房, 2015.
- [11] 藤澤伸介, 言語力 認知と意味の心理学, 新曜社, 2011.
- [12] 藤田博司, 「集合と位相」をなぜ学ぶのか, 技術評論社, 2018.
- [13] 秦宏一, 英語動詞の統語法 日英語比較の新たな試み, 研究社, 2009.
- [14] アンリ・ベルクソン著 杉山直樹訳, 物質と記憶, 講談社学術文庫, 2019.
- [15] 宮本啓一 石飛道子, ビックリ! インド人の頭の中ー超論理思考を読む, 講談社, 2003.
- [16] 太田信夫 巖島行雄, 現代の認知心理学 2 記憶と日常, 北大路書房, 2011.

ビジネス文書 書き方読本（ダイジェスト版）

2023 年 1 月 20 日 初版

著者 産業日本語研究会 ライティング分科会

Copyright © 産業日本語研究会 ライティング分科会